

大学生の仲間入り場面における社会的情報処理の検討

久木山 健 一¹⁾

問題と目的

大学生の時期は、それまでの地域・学校を中心とした友人関係から離れ、新しい友人関係および親密な関係の形成、年齢・出身などの異なる友人との関係を結ぶ時期である。また、アルバイトなどでの学校外の人々との交流の中から、社会に出て行くのに適した形に社会的スキルを充実させる時期でもある。こうした重要な時期において他者との相互作用が阻害されることは、後の適応に関してリスクを有することが考えられる。そのため、本研究では適切な友人関係形成を阻害する要因として引っ込み思案をとりあげ、引っ込み思案のものが困難を覚えると思われる仲間入り場面において、引っ込み思案関連行動の生起のプロセスについての検討を行う。

引っ込み思案という概念はシャイネス・対人恐怖（不安）・内向性の類似概念であり、それらについては明確な区別の必要性がいわれているが、実際にはなされていない。シャイネスに関して最初にその問題性を整理し包括的に検討を加えた Zimbardo (1977) は、シャイネスの定義および類似概念との相違ということに関しては明確な言及を行っておらず、引っ込み思案はシャイネスと同じものを示すものとされている。児童期においては Rubin & Asendorpf (1993) において、引っ込み思案とシャイネス、行動抑制はそれぞれ混同してはならない異なる概念であることが指摘されている。彼らは Asendorpf (1990) の社会的接近動機と社会的回避動機の2つの動機からなる4つのタイプにおいての社会的コンピテンスの比較の研究をもとに、以下の3つに引っ込み思案を分類している。①接近傾向も回避傾向も低い対人的に消極的な引っ込み思案群 ②接近傾向も回避傾向も高く対人恐怖や評価懸念を示すシャイネスおよび行動抑制群 ③接近傾向が高く回避傾向が低い仲間から拒否される、行動面でコンピテントでない群。ここでは、

シャイネスは引っ込み思案の下位分類とされている。

このように引っ込み思案やシャイネスといった概念は、明確に定義されてこなかったために非常に幅広い概念となっている。これらの概念の使い分けは基本的には対象の年齢によるところが大きい。主に児童を対象とした研究者では引っ込み思案という概念により研究が行われており、青年、成人を対象とした研究においてはシャイネス・対人恐怖・内向性という概念を使用した研究がなされている。これら2つを比較した場合、青年期・成人期に関してはシャイネスなどの性格特性を使用した上で、シャイネスなどの性格特性が高い者の特徴の検討が多くなされている。児童期の研究に関しては、仲間から拒否される子どもの持つ代表的な社会的不適応として、攻撃と引っ込み思案をあげ、社会的認知の未成熟および社会的スキルの欠如などとの関連を検討している (Asher & Coie, 1990; Crick & Dodge, 1994)。児童期における研究と、青年・成人期の研究を比較すると、児童期においては引っ込み思案による仲間からの拒否といった他者との相互作用の段階についての考察も多くなされている。それに対し、青年・成人期のシャイネス研究においては個人の内的要因への関心が主であり、シャイナ人の現実の友人関係や社会的ネットワークの特徴を検討した研究が少ないことが指摘されている (石田, 1998)。しかし、大学生においても現実の友人関係への影響などの視点を加味した研究が必要であると考えられる。

現実の友人関係への影響および社会的不適応への介入の視点を有しているモデルとして Dodge (Dodge, 1986; Crick & Dodge, 1994) の社会的情報処理モデルをあげることができる。Dodgeの社会的情報処理モデルは、以下の4つの利点を有している。社会的相互作用の間に生じる実際の過程を明確化できる・ある社会的認知が、いかにしてある社会的行動を導くかを説明可能である・認知構造と行動表出との関係が明確である・人の社会的行動が状況によって変動することを説明できる (Dodge, Pettit, McClaskey & Brown, 1986)。

Dodgeの社会的情報処理理論は、社会的行動を問題

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

解決行動の対象となる刺激とみなし、刺激の処理の結果として行動の生起過程を説明する。Dodge のモデルに含まれている情報処理は以下の6つのステップからなる (Fig. 1)。符号化のステップにおいては自己の内外に存在するさまざまな手がかりを、感覚過程を通じて受容し知覚する事が求められる。ここでは、不適切な手がかりへ選択的に注意する事や効率の悪さが問題とされる。解釈のステップでは、スキーマやスクリプトを照合しながら、手がかりの心的表象化と解釈が行われる。ここでは、過度に敵意を解釈したりする事などの解釈のゆがみが問題とされる。目標の明確化のステップでは、目標を新しく作るもしくは明確にする事が行われ、不適切な目標を打ち立てたり追求したりことが問題とされる (Dodge, Asher, & Parkhurst, 1989)。反応の検索と構築のステップでは、長期記憶にある行動のレパートリー

から状況に適切な反応の検索が行われる。ここでは、検索された反応の数・現実的な内容・検索の順番が問題とされ、数が少ない事や非現実的な反応の検索などが問題とされる。反応の決定のステップでは、検索した反応の中から実際に行動に移す行動を評価した選択が行われる。ここでは反応それ自体の内容、反応によって起きる結果の予期、反応の実行への効力予期などが要因として存在し、予期が実際と合わない事が問題とされる。反応実行のステップでは選択された行動が実行に移される。本研究では、社会的情報処理モデルの内の前半の4ステップと実行される行動との関連についての検討を行う。

Dodge の社会的情報処理モデルは、主に攻撃行動の生起の解明を目的として検討がなされてきたため、引込み思案行動を予測するのに有効な測度が存在していない。そのため、本研究では社会的情報処理の各ステップ

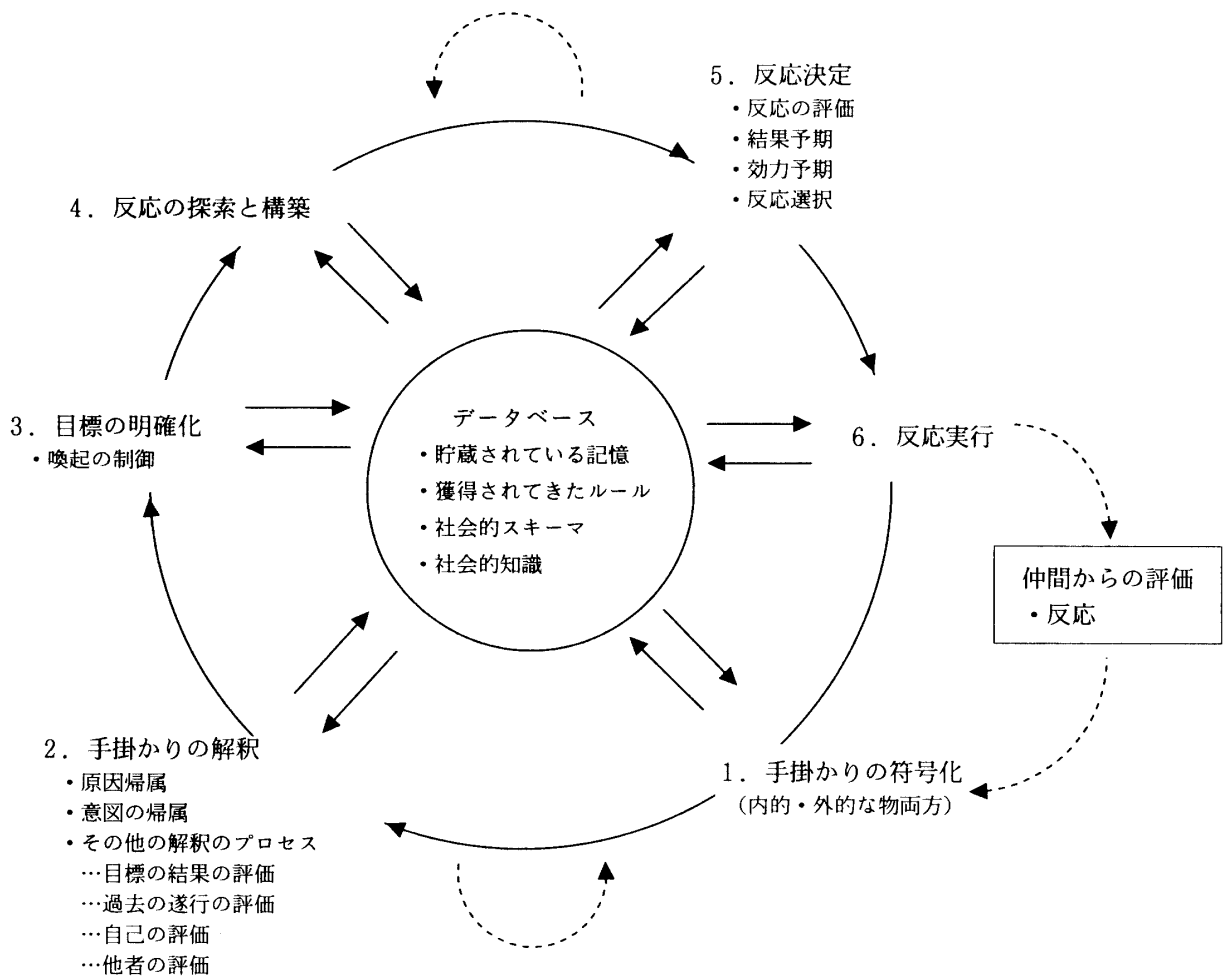


Fig. 1 社会的情報処理モデル (Crick & Dodge, 1994)

に引込み思案行動の検討を可能にする変数を、解釈および目標設定のステップに導入し検討を行う。

符号化のステップに関しては、相互作用の相手の表情の符号化を取りあげ、相手の表情のネガティブな点に注意を払いやすいことにより後の社会的情報処理が不適応の方向に変化するという仮説の検討を行う。

解釈のステップに関しては、これまで問題の原因および責任を相手に帰属するバイアスとしての敵意帰属バイアスを想定し、攻撃行動の選択との関連を検討する研究が主であった。しかし敵意帰属バイアスのみでは、引込み思案行動に関する検討は困難であると思われる。引込み思案およびそれに類する行動傾向に関する研究としては、児童において引込み思案で拒否されている子どもの自己知覚が低いとする研究 (Boivin, Thomassin, & Alain, 1989; Hymel, Bowker & Woody, 1993)、社交性の高い群に比べて、社交性の低い群では、自分自身を社会的・認知的・身体的なコンピテンスや自己価値全般が低いと認知していることを見出した研究が存在する (Rubin & Krasnor, 1986)。大学生については、シャイネスと自尊感情との負の相関関係や自己嫌悪感、劣等感との正の相関関係 (桜井・桜井, 1991; 相川, 1991) などが見出されている。これらのことから、引込み思案およびそれに類する行動傾向を示すものは、自己を非難するような帰属バイアスを有していることが考えられる。社会的情報処理理論において使用されている意図のあいまいな場面を同様に採用している、Rosenzweig (1978) の欲求不満に対するアグレッションの理論、および日本における PF-Study の反応の因子分析的研究を行った一谷・林(1976)においては、アグレッションの方向として他責・自責・無責というカテゴリーが存在している。Rosenzweig (1976) の理論によると、他罰と自罰は独立したものとして存在し、他責-自責という1次元ではなく、独立した2次元としてとらえる必要を述べている。これらのことから、敵意帰属バイアスに加え、自責的な帰属のバイアスを検討することにより行動の予測が高まると考えられる。そのため、問題の原因および責任を自分に帰属するバイアスとして、自責帰属バイアスという帰属のバイアスを採用し、自責帰属バイアスが高いことにより引込み思案行動の選択が促進されるという仮説の元に検討を行う。

目標設定のステップに関しては、Renshaw & Asher (1983) は対人場面のさまざまな目標設定は、友好性目標と主張性目標によって説明が可能であるとしている。例えば、濱口 (1992a; 1992b; 1992c; 1994) は同様の検討を行い、友好的目標が攻撃行動選択の負の予測因・主張行動の正の予測因であり、主張的目標が攻撃行動・

主張行動の正の予測因であり無罰行動の負の予測因であることを見出している。しかし、Eardley & Asher (1996) では、目標は実際の行動に即した8種類の設定がなされており、引込み思案行動に適した目標を導入することが必要であると考えられる。そのため本研究においては、引込み思案の者が設定を行いやすいと考えられる、その場からの回避を想定した回避目標の設定を追加して検討を行う。

反応検索のステップに関しては、濱口 (1994) において特定の反応への検索数の多さが、その後実行される行動の選択と関連があることが示されている。そのことから本研究においては、全反応検索数中において最も検索数が多い行動と、実行される行動との間に関連が存在するという仮説の検討を行う。

次に社会的情報処理のプロセス以外の要因と社会的情報処理との関連の検討を、疲労を対象にして行う。児童期の研究においては、社会的情報処理の各処理段階での不適切な処理と、不適応な行動の選択の関連の検討が中心となっている。しかし大学生においては、通常状態においての処理の不適切さというものは、それほど多くないことも考えられる。「いつもは適切な行動をとることができるのに、ついイライラしていたからきつい言い方をしてしまった。」「疲れていたからぞんざいな対応をってしまった。」といったことは誰にでもある経験であり、大学生においての不適応な行動の選択は、そのような要因による社会的情報処理の悪化によるものが大きいとも考えられる。社会的情報処理のプロセスに影響を及ぼすプロセス外の要因としては、情動の要因の検討の必要性が指摘されている (Dolgin, 1986; Dodge, 1991; Crick & Dodge, 1994)。疲労感は社会的情報処理に影響を及ぼす先行要因として、Dodge (1991) により指摘がなされており、産業心理学の分野においては、疲労による情報処理の悪化が様々な研究により示されている (齊藤, 1981)。これらのことから、社会的な分野における疲労感と情報処理の関連を検討することは有意義であると思われる。本研究においては、疲労により情報処理が悪化し、社会的不適応行動の選択に結びつく情報処理がなされやすくなるという仮説の検討を行う。

これらのことから本研究では以下の事を目的とする。

第1に、児童期の社会的情報処理研究を参考に、大学生に社会的情報処理理論を適用した測定を行い、仲間入り場面での社会的情報処理研究の大学生への適用可能性を検討する。第2に社会的情報処理の各ステップの関連について検討を行い、社会的不適応行動の生起プロセスについての検討を行う。第3に、疲労と社会的情報処理の関連の検討を行う。

方法

調査対象・時期 被験者は近畿圏共学国立大学106名(男子72名・女子34名, 平均年齢20.10), 共学私立短期大学112名(男子7名・女子105名, 平均年齢18.26)の計218名であった。調査は, 1999年6月に大学の講義時間に集団で実施された。

質問紙

①社会的情報処理に関する項目

Fig. 1の社会的情報処理モデルをもとに, 大学生が見知らぬ人と関係を開始することが求められる仮想場面を設定した。その場面における社会的情報処理としてステップ1「符号化」, ステップ2「解釈」, ステップ3「目標設定」, ステップ4「反応検索」, ステップ6「反応実行」を選択し, 以下の項目により測定を行った。

場面設定 : 「あなたは他学部の授業を受けることになりました。知り合いは誰もいません。他の受講生はみな顔見知りの方です。先生から, 非常に骨の折れるレポート課題が出されグループを組んで取り組むように指示されました。他の受講生はレポートの分担を始めましたが, 誰もあなたを誘ってはくれません。」

ステップ1「符号化」 : 仮想場面における相手の表情の符号化をとりあげた。相手の表情をどのように符号化したのかについての反応を, 「他の受講生は, あなたに対してどういった表情をしていると思いますか。」という質問文により自由記述で採集した。

ステップ2「解釈」 : 以下の4項目について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの4件法により, あてはまる度合いの方向に1点から4点を与えた。**敵意帰属バイアス** : 意図の不明瞭な場面において相手にどの程度の敵意を感じるかという測度である。濱口(1992a; 1992b; 1992c; 1994)などの項目を参考に, 仲間入り状況で使用が可能で, かつ大学生対象に使用できるように表現を改めて作成した。(2項目)。**自責帰属バイアス** : 意図の不明瞭な場面において自分に過失もしくは欠陥があることを帰属するバイアスに関する測度を想定し, Rosenzweig(1976)の理論を参考に項目を作成した。(2項目)

ステップ3「目標設定」 : Renshaw & Asher(1983), 濱口(1992a; 1992b; 1992c; 1994), 松尾・新井(1997)により対人関係場面において安定してみられるとされる主張目標4項目および友好目標を2項目作成した。また本研究が仲間入り場面であるため独自に回避目標を2項目作成した。「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの6件法によりあてはまる度合いの方向に1点から6点を与えた。

ステップ4「反応検索」 : 先行研究濱口(1994)にならない「この場面でとりうる行動を思いつく限り書き入れて下さい」という質問に対する自由記述を最大8つまで採集した。

ステップ6「反応実行」 : ステップ5で書き入れられた最大8つまでの自由記述の中から「書いたものの中からあなたが実際に行うと思う行動の一つ丸をつけて下さい」という指示の元に行う行動を選択させた。

②疲労尺度

産業疲労研究会(1970)による「自覚症状調べ」の30項目を使用した。この尺度は, 「眠けとだるさ」, 「注意の散漫」, 「局所症状」の3つの下位尺度からなり, 「ふだん, 次のようなことがよくありますか」という指示の元にあてはまる自覚症状に丸をつけさせた。各下位尺度毎に丸の個数を合計したものを各下位尺度の得点とした。なお, 本尺度に関しては短大生にのみ実施した。

結果と考察

社会的情報処理項目の検討

解釈の4項目に関して相関係数を求めたところ, 想定した2項目間の相関係数が他と比較して高く(それぞれ $r=.67, .66$), その他の相関係数は $.25\sim.45$ であった。また, 調査の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生2名に4項目の分類を求めたところ, 完全に一致した。そのため, 想定した2項目の平均を敵意帰属バイアス得点, 自責帰属バイアス得点とした。

目標設定の8項目に関して相関係数を求めたところ, 主張目標と想定された4項目間の相関係数は $.47\sim.81$, 友好目標と想定された2項目間の相関係数は $.63$, 回避目標と想定された2項目間の相関係数は $.46$ と比較的高い相関係数の値を示した。友好目標と回避目標と想定される項目に関しては, その他の項目との相関係数は想定された2項目間との相関係数より低い値を示した。主張目標と想定された4項目に関しては, 一部友好目標と高い相関を示すものも存在した。本研究において作成された主張目標は, 攻撃的にならずに適切な主張を行うことを目的とした主張に関する目標設定であったために, このような結果になったと思われる。このように, 相関係数の結果からは想定された分離がなされなかった。しかし, 調査の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生2名に8項目の分類を求めたところ, 完全に一致した。したがって想定された項目の平均を主張目標得点, 友好目標得点, 回避目標得点とした。

自由記述データの分類

符号化 : 得られた自由記述をもとに, 心理学を専攻する

大学院生2名によりKJ法を行い、以下のカテゴリーを作成した。

気づいているが無視をしている…被験者の存在に気づいているが、わざと気づいていないふりをしていたり無視をしていたりしている。

自分の存在に気づいていない…わざと無視しているのではなく、そもそも気づいていないので行動を起こしていない。

単なる興味・関心…被験者に気づいていて関心を示しているが、積極的に配慮を示すものではない。

配慮…被験者に気づき、仲間に入れてあげようという配慮を示している。

次に、上記のカテゴリーに各回答を分類する作業を実験の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生2名により行った。分類の一致率は82.3%であった。一致しなかった項目に関しては、筆者を含めた3名により協議し、いずれかのカテゴリーに分類、もしくは分類不能として分析から外す作業を行った。

反応検索：反応生成数を求めるための行動のカテゴリーの作成を目的に、自由記述を元に心理学を専攻する大学院生2名によりKJ法を行い、以下のカテゴリーを作成した。

孤立行動…自分ひとりになる、自分ひとりで問題を解決しようとする行動。(例：何もせずに一人にいる・一人でレポートをしようとする。)

依存行動…問題解決を他者に依存する行動。(例：先生に頼む・相手に気づかれるような行動をする・働きかけを待つ。)

主張的行動…自分から適切に主張して問題を解決する。(例：自分から主張して仲間に入る・入ろうとする。)

回避行動…問題場面から回避する。(例：授業をとるのを止める・授業を放棄する。)

次に、上記のカテゴリーに各回答を分類する作業を調

査の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生2名により行った。分類の一致率は91.5%であった。一致しなかった項目に関しては、筆者を含めた3名により協議し、いずれかのカテゴリーに分類、もしくは分類不能として分析から外す作業を行った。また、濱口(1994)にならい、全産出数に占める各カテゴリーの行動の産出数の割合をもって各行動カテゴリーの産出数とした。(例：回避行動の産出率=回避行動の産出数/全反応産出数)

行動実行：丸のついた行動が存在する「反応検索」ステップで抽出されたカテゴリーを、実行を選択したカテゴリーとした。

社会的情報処理尺度の検討

性差について検討を行った。(Table 1) 自責帰属バイアス、主張目標、友好目標、回避目標、主張行動産出率において女子の方が高いことが見出された。

自責帰属バイアスの性差に関しては、女子の方が問題を自分のせいにしやすいという結果が得られた。秦(1993)によると、PF-Studyを使用した研究より、中学生の女子において、男子に比べフラストレーション状況において相手に問題の解決を求める依存傾向や、自己の過失に対して素直に非を認める傾向が存在することが見出されている。これらのことから、大学生段階においても女子において自責帰属バイアスが高いという結果が出たと思われる。

目標設定に関してはすべての目標設定に関して、男子より女子のほうが高いという結果が示されている。大学生段階においての友人関係は、男子に比べると女子の方が密接で良好であるとする研究(落合・佐藤, 1996)が存在する一方、対人恐怖やシャイネスに関して女子のほうが高いとする研究も存在し²⁾(Elkind & Bown, 1979), 仲良くし主張しようという目標を持ちながらも回避をし

Table 1 社会的情報処理測度の平均値・標準偏差

尺 度	男 性		女 性		全 体		平均の性差 (t検定)
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	
敵意帰属バイアス	1.35	(0.51)	1.37	(0.48)	1.36	(0.49)	-0.16
自責帰属バイアス	1.64	(0.61)	1.95	(0.75)	1.84	(0.72)	-3.28**
主張目標	2.87	(0.65)	3.05	(0.57)	2.98	(0.61)	-2.06*
友好目標	3.10	(0.63)	3.37	(0.59)	3.27	(0.62)	-3.07**
回避目標	2.53	(0.68)	2.80	(0.60)	2.70	(0.64)	-2.86**
依存行動産出率	0.09	(0.15)	0.11	(0.21)	0.10	(0.19)	-0.63
孤立行動産出率	0.20	(0.26)	0.15	(0.25)	0.17	(0.25)	1.19
主張行動産出率	0.31	(0.27)	0.41	(0.33)	0.38	(0.32)	-2.40*
回避行動産出率	0.17	(0.22)	0.13	(0.21)	0.14	(0.21)	1.56

*…p<.05 **…p<.01

Table 2 表情の符号化の各群における社会的情報処理各測度の平均と標準偏差

表情	無視		気づいていない		関心興味		配慮		平均値の検定 F値
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	
敵意帰属バイアス	1.27	(.40)	1.34	(.50)	1.39	(.44)	1.20	(.38)	1.20
自責帰属バイアス	1.74	(.74)	1.74	(.71)	1.88	(.71)	1.74	(.50)	0.53
主張目標	2.74	(.60)	3.05	(.56)	3.01	(.54)	3.19	(.66)	3.20*
友好目標	3.06	(.69)	3.25	(.58)	3.34	(.54)	3.40	(.61)	1.87
回避目標	2.68	(.61)	2.72	(.65)	2.71	(.70)	2.56	(.56)	0.42
依存行動産出率	0.47	(.35)	0.35	(.27)	0.37	(.33)	0.38	(.33)	1.15
孤立行動産出率	0.24	(.26)	0.17	(.21)	0.09	(.17)	0.09	(.14)	4.74**
主張行動産出率	0.06	(.14)	0.09	(.16)	0.11	(.21)	0.17	(.29)	1.76
回避行動産出率	0.09	(.18)	0.17	(.26)	0.22	(.28)	0.22	(.28)	1.97

*... $p < .05$ **... $p < .01$

たいとも考えている像が考えられる。以上のことから性差が確認されたが、本研究の被験者は女性は短大生が多く男性は4年制大学生が多いという変則的なものであったため、性の要因のみではなく学校の要因が関係したとも考えられる。そのため、以下の研究においては男女を込みに分析を行った。

仲間入り場面における社会的情報処理の関連の検討

(1) 「符号化」(表情の符号化)のステップと社会的情報処理との関連の検討

表情の符号化と社会的情報処理の関連を検討するために、表情の符号化の分類をもとに、無視群(N=31)、気づいていない群(N=64)、興味・関心群(N=54)、配慮群(N=25)を作成した。表情の符号化の異なる群毎で、どのように社会的情報処理の各測度が異なるかの検討を行った。各社会的情報処理測度を従属変数とする一元配置分散分析を行った結果をTable 2に示す。主張目標設定と回避行動産出率に有意な差が見られた(順に $F(3,171)=3.20$, $F(3,173)=4.74$)。有意差のみられたものについてLSD法により多重比較を行った。その結果「主張目標」に関しては「無視群」<「気づいていない群」「関心・興味群」「配慮群」という関係がみられた。「回避産出率」に関しては、「無視群」・「気づいていない群」>「関心・興味群」「配慮群」という関係がみられた。

すなわち、相手の表情を無視している表情であると符号化したものは、そうでないものよりも主張目標を持つ

ことが少なくなり、相手の表情を無視している表情、もしくは気づいていないと符号化したものは、相手の表情に関心・興味を符号化した群、もしくは配慮を符号化した群よりも、回避的な行動を産出することが多いことが示された。

これらのことから、とくに相手の表情を、無視をしていると符号化したものは、それ以降の社会的情報処理においてネガティブな様相を示すことが示された。無視とその他の表情の符号化のカテゴリーを比較すると、相手の意図的な拒否への注意が高いことが考えられ、そのために主張目標が減少し回避行動産出率が増加し回避的な社会的情報処理が行われることが示唆された。

(2) 「解釈」,「目標設定」,「反応検索」のステップの影響関係の検討

理論に基づき「解釈」→「目標設定」→「反応検索」という流れを想定して、階層的重回帰分析を行うことにより、パス解析を行った。パス解析を行う変数間の相関係数をTable 3に示した。パス解析の結果をFig. 2に示す。

まず、「解釈」→「目標設定」という流れについてみていく。主張目標に関していうと、敵意帰属バイアスからの負のパスが有意となった($F(2,215)=4.19$, $p < .05$)。仲間入り場面において、相手に「わざと無視しているのだろう」といった敵意を感じると、主張目標が減少することが示された。友好目標に関しては、敵意帰属バイアスから負のパス、自責帰属バイアスからの正のパスが有意となった($F(2,215)=4.07$, $p < .05$)。回避目標に関しては、敵意帰属バイアスからの正のパス、自責帰属バイアスからの正のパスが有意となった($F(2,215)=15.56$, $p < .01$)。敵意帰属バイアスは主張目標を減少させ、友好目標を減少させ、回避目標を増加させるなどの

2) ただし、シャイネス、対人恐怖とも性差に関しては一貫した結果が得られておらず、状況などを要因にした検討の必要性が指摘されている(Leary, 1983)

不適応行動へとつながる影響を示した。自責帰属バイアスに関しては友好目標を高めるという適応的な面と、回避目標を高めるという不適応的な面の両方の影響関係を示すことが示された。自分が悪いと思うことで消極的になる流れと、自分が悪いのだから反省して仲良くしようという流れが存在すると思われる。

次に「反応検索」のステップへのパスを検討する。依存行動産出に関しては、重回帰式が有意にならなかった ($F(5,212) = .27, p > .05$)。孤立行動産出に関しては、主張目標からの負のパスが有意となった ($F(5,212) = 3.50, p < .01$)。主張行動に関しては、主張目標から正のパス、回避目標からの負のパスが有意となった ($F(5,212) = 6.11, p < .01$)。仲間入り場面において主張目標を持つこと、および回避目標を持たないことにより、

主張行動の産出率が高まることが示された。回避産出率に関しては、自責帰属バイアスからの負のパスが有意となった ($F(5,212) = 2.46, p < .05$)。仲間入り場面において自責帰属バイアスが低いことにより、回避行動の産出率が高まることが示された。これらのことから、主張目標は、主張産出率を高め孤立産出率を低めるなどの適応的な役割を果たすことが見出された。回避目標は主張産出率を低めるなどの不適応的な役割を果たすことが確認されたが、回避行動の産出率との間には関連が見出されなかった。

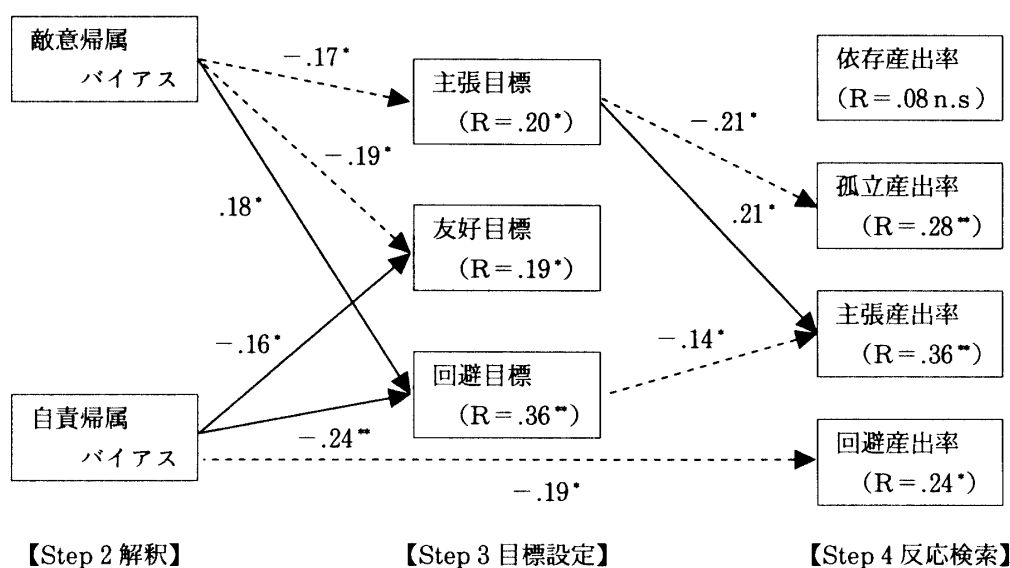
(3) 「反応実行」ステップと社会的情報処理の関連の検討

「反応実行」において選択された行動により、依存行

Table 3 社会的情報処理各測度の相関係数

	自責帰属 バイアス	主張目標	友好目標	回避目標	依存産出率	孤立産出率	主張産出率	回避産出率
敵意帰属バイアス	.42**	-.19*	-.12	.28**	.01	.17*	-.13	.01
自責帰属バイアス		-.12	.08	.32**	.00	.02	.01	-.14*
主張目標			.60**	-.29**	.04	-.24**	.31**	-.15*
友好目標				-.05	.07	-.18*	.23**	-.14*
回避目標					.03	.04	-.20**	.07
依存産出率						-.17*	-.17	-.08
孤立産出率							-.34**	-.16*
主張産出率								-.21**

*... $p < .05$ **... $p < .01$



*... $p < .05$ **... $p < .01$

実線の矢印は β が正であり、点線の矢印は β が負であることを示す

Fig. 2 社会的情報処理モデルによるパス解析

動群 (N=10)・孤立行動群 (N=31)・主張行動群 (N=127)・回避行動群 (N=10)を作成した。上記の手続きで作成された各行動群において、社会的情報処理の様相がどのように異なるのかを検討するために、各社会的情報処理測度を従属変数とした一元配置の分散分析を行い、その結果より、有意差がみられたものについてLSD法により多重比較を行った。各測度毎にその結果をあげる (Table 4)。

「解釈」のステップに関しては、敵意帰属バイアスにおいて有意差がみられた。多重比較の結果敵意帰属バイアスに関しては、「主張行動群」<「孤立行動群」の関係がみられた。

「目標設定」のステップに関しては、すべての測度において有意差がみられた。主張目標に関しては、「孤立行動群」・「回避行動群」<「依存行動群」<「主張行動群」という関係がみられた。友好目標に関しては、「孤立行動群」・「回避行動群」<「主張行動群」という関係がみられた。回避目標に関しては、「孤立行動群」・「回避行動群」>「主張行動群」という関係がみられた。

「反応生成」のステップに関しては、すべての測度において有意差がみられた。攻撃行動産出率に関しては、「依存行動群」<「主張行動群」という関係がみられた。主張行動産出率に関しては、「依存行動群」・「孤立行動群」・「回避行動群」<「主張行動群」という関係がみられた。回避行動産出率に関しては、「依存行動群」・「孤立行動群」・「主張行動群」<「回避行動群」という関係がみられた。依存行動産出率に関しては、「孤立行動群」・「主張行動群」・「回避行動群」<「依存行動群」という関係がみられた。孤立行動産出率に関しては、「主張行動群」・「回避行動群」・「依存行動群」<「孤立行動群」という関係がみられた。反応産出率において、あるカテゴリーの行動を選択したものはその他のカテ

リーの産出率に比べて、該当するカテゴリーの反応の産出率が高いことが示された。このことから「反応検索」のステップと「反応実行」のステップの間には密接な関係が示唆されるために、今後は相関関係および影響関係の検討が望まれる。

全体を通じると、孤立行動選択群および回避行動選択群と主張行動選択群の間に顕著な差がみられた。孤立行動および回避行動はその他の行動と比較して相手との関係性を絶ってしまうという点で異なっていると思われる、最も不適応的であるといえよう。加藤 (2000) は対人ストレスとコーピングとの関連を検討し、関係を崩壊するような対処行動であるネガティブ関係コーピングが対人関係において不適応的であることを示している。児童期ではCrick & Dodge (1989) が、関係を壊すような目的をもつことと社会的不適応との関連があることを見出している。これらの原因として本研究では敵意帰属バイアスの高さ、主張目標・友好目標の低さ、回避目標の高さなどの関与が考えられることがしめされた。依存行動選択群においては、その他の行動群との差はあまり明確に確認できなかった。ただし主張目標での結果等から、主張目標が主張行動選択群ほど高くはないが、孤立行動選択群および回避行動選択群などと比較して高いことが示されており、そのために自分からの主張はせずに相手に依存する行動を選択するともいえよう。主張行動に関する研究においては、自己効力との関連を検討している研究が多く、社会的情報処理においても自己効力の視点の導入の必要性が主張されている (松尾・新井, 1997)。今後各行動選択群の相違を明らかにするためには、自己効力などの検討も必要になってくるであろう。また、Dodge & Price (1994) や松尾・新井 (1997) などでは複数の場面における社会的情報処理をとりあげており、複数の場面の比較による場面の特徴の理解などが望まれ

Table 4 行動選択各群における社会的情報処理各測度の平均と標準偏差

測 度	①依存行動群 (N=10)		②孤立行動群 (N=31)		③主張行動群 (N=127)		④回避行動群 (N=10)		検定 (F値)	多重比較 (LSD)
	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)	Mean	(SD)		
敵意帰属バイアス	1.55	(0.55)	1.55	(0.64)	1.29	(0.45)	1.55	(0.50)	3.33*	③<②
自責帰属バイアス	1.80	(0.79)	1.84	(0.61)	1.82	(0.72)	1.70	(0.42)	0.11n.s	
主張目標	2.80	(0.71)	2.40	(0.51)	3.21	(0.49)	2.35	(0.44)	27.49**	②・④<①<③
友好目標	3.10	(0.66)	2.85	(0.75)	3.39	(0.55)	2.90	(0.39)	8.35**	②・④<③
回避目標	2.90	(0.94)	2.92	(0.50)	2.59	(0.63)	3.10	(0.46)	4.27**	③<②・④
主張行動産出率	0.23	(0.24)	0.16	(0.20)	0.53	(0.28)	0.15	(0.21)	22.26**	①・②・④<③
回避行動産出率	0.06	(0.12)	0.10	(0.18)	0.14	(0.18)	0.61	(0.29)	21.44**	①・②・③<④
依存行動産出率	0.56	(0.33)	0.03	(0.09)	0.10	(0.17)	0.06	(0.13)	26.17**	②・③・④<①
孤立行動産出率	0.10	(0.18)	0.57	(0.29)	0.11	(0.17)	0.03	(0.11)	48.74**	①・③・④<②

*...p<.05 **...p<.01

ることから、複数の場面での社会的情報処理の検討および比較が必要とされるであろう。

疲労と社会的情報処理の関連の検討

疲労尺度の平均は、「眠けとだるさ (M=3.74, SD=2.12)」、「注意の散漫 (M=2.87, SD=2.61)」、「局所症状 (M=1.61, SD=1.48)」であった。疲労の各下位尺度と社会的情報処理の各測度との関連を検討するために、相関係数を求めた。結果を Table 5 に示す。

「眠けとだるさ」を自覚することが多いことと、回避目標を持つことが多いことに関連が見られ、回避行動の産出率とも関連があることが示された。「注意の散漫」を自覚することが多いことと、主張目標を持つことが少ないことに関連があり、回避目標を持つことの多さと関連のあることが示された。また、主張行動の産出率が減少し回避行動の産出率が高まることが示された。「局所症状」に関しては、社会的情報処理の各測度との関連はみられなかった。

これらのことから、疲労により社会的情報処理が不適応行動を産出する方向、特に回避的行動の選択に係る要因との関連があることが示され、疲労の自覚と社会的情報処理が悪化に関連があるという仮説は支持された。しかし、疲労と社会的情報処理に関連があることは示されたが、いずれも相関係数の値は大きくなく、疲労と社会的情報処理は直接的な関連があるのではなく媒介する要因の存在も考えられる。そして、本研究での疲労は実際の疲労ではなく自覚を測定したものであり、気づかれない疲労との関連などを実験的な操作により検討する必要もある。また、本研究の社会的情報処理は、短大生における仲間入り場面での社会的情報処理に限定されているために、その他の対象および場面における疲労との検討も必要となるであろう。また、同じ疲労状態にあるものにおいても、社会的情報処理の悪化する群と悪化しない群というものが想定され、また疲労による社会的情報処理の不適応化を緩和する緩衝材の働きをする要因の存在も考えられる。また、本研究の疲労の調査は長期の疲労を測定したものであるために、1 状況における社会的情報処理に直接的な関連を示さなかったとも考えられ

る。今後はそのような要因を明らかにした上で関連を検討する必要がある。

まとめと今後の課題

本研究では Dodge の社会的情報処理モデルを大学生の仲間入り状況に当てはめ、そのプロセスの検討を行うことでモデルの大学生への適合可能性の検討を行い、また疲労と社会的情報処理の関連の検討を行った。パス解析によるモデルの適合性に関して言うと、反応検索のステップに対する重回帰式の重相関係数の値は $R = .24 \sim .36$ と低く、積極的に解釈を行うことが不可能な結果であった。この原因として考えられることとして、反応検索の指標として各反応の産出率を使用したことが考えられる。解釈のステップおよび目標設定のステップに関しては、遭遇する状況に大きく影響を受けるものであるのに対して、反応検索のステップは検索の対象となるデータベースに影響を受けることのほうが大きいと思われる。反応実行とそれ以前の社会的情報処理のステップの検討の結果からは、解釈・目標設定・反応検索のいずれのステップとも反応実行と関連があることが見出されている。これらのことから、社会的情報処理モデルに関しては各々のステップが、確実に以下のステップに影響を及ぼすというような関係のみではなく、比較的独立に行動選択や行動実行のステップに影響を及ぼすような関連の存在というものも考えられる。ただし、同様の検討を小学生の高学年を対象に行った濱口 (1992b, 1994) においては、本研究より高い重相関係数が報告されている。本研究では Fig. 1 で示した Dodge の社会的情報処理モデルのうち、反応決定のステップについては検討を行うことができなかった。濱口 (1992b, 1994) では、反応決定のステップを独立変数として含んでおり、その点でこのような差が出たとも考えられる。大学生段階では、児童期において注目されている解釈や目標設定といった基本的なステップでのエラーよりも、行動の実行時において自信がなかったりネガティブな情動を感じることによる阻害という要因のほうが大きいとも考えられる。今後は、自己効力感もしくは実行時の情動および情動制御などの要因を考慮に入れた上での検討が必要となってくるであろう。

Table 5 疲労と社会的情報処理各測度の相関係数

	敵意帰属 バイアス	自責帰属 バイアス	主張目標	友好目標	回避目標	主張産出率	回避産出率	依存産出率	孤立産出率
眠けとだるさ	.03	.10	-.17	.00	.21*	-.11	.27**	-.05	.00
注意の散漫	.07	.04	-.25**	-.13	.31**	-.20*	.31**	.06	-.10
局所症状	.05	.18	-.12	-.02	.09	-.16	.03	.06	-.02

*... $p < .05$ **... $p < .01$

う。また各ステップごとに作成された項目の数が少なく、項目間の相関が高いなどといった項目作成の問題、および質問紙法の使用による実際の社会的情報処理との解離という要因も考えられ、これらの点を改善した上での再調査が必要である。

本研究において導入した自責帰属バイアスに関して考察すると、友好目標への正のパス、回避産出率への負のパスが存在する適応的な面と、回避目標への正のパスが存在する不適応的な面の両面をもったものであることが示された。自責帰属バイアスには、自分の非を認めた上で問題を改善しようとする流れと、自己を非難しその後の適応的な行動を抑制する流れの両方ともが考えられた。今後自責帰属バイアスが高いものにおいて、適応的な流れを示すものと不適応的な流れを示すものとの相違を生み出す要因についての検討や、仲間入り場面以外での自責帰属バイアスの果たす役割の検討などを行う必要があるであろう。

回避目標に関しては、回避目標設定と回避行動産出率の間に関連は見られず、回避的な目標を持ったからといって回避行動の産出が増えるわけではないことが示された。しかし、反応実行と社会的情報処理の関連に関する分析により、回避行動を選択した群において、回避目標が主張行動選択群より高いことが示されていることから、回避目標が高い場合、回避行動の検索の数が増えるわけではないが、検索された回避行動が実行される確率が高まることが考えられる。すなわち、検索された行動レポーターそれぞれにおいて、実行の選択のなされやすさといった相違が存在するとも思われ、今後はそのような視点を導入した上での検討が必要となってくるであろう。

疲労に関しては、疲労を自覚しているものほど社会的情報処理が悪化し、特に回避行動に結びつくように社会的情報処理が変化することが確認された。Lemerise & Arsenio (2000) による社会的情報処理と情動の統合モデルによると、社会的情報処理のプロセス以外の要因で社会的情報処理と関連をもつ情動要因として情動制御、ムード、情動を喚起させるイベントなどが挙げられている。今後はそれらの検討も重要となってくるであろう。

引用文献

- 相川充 1991 特性シャイネス尺度の作成および信頼性と妥当性の検討に関する研究 心理学研究 62,149-155
- Asendorpf, J. B. 1990 Beyond social withdrawal: Shyness, Unsociability, and Peer avoidance. *Human development*, 33, 250-259.
- Asher, S.R. & Coie, J.D. 1990 *Peer rejection in childhood*. Cambridge University Press. (山崎晃・中澤潤 監訳 1996 子どもと仲間の心理学—友だちを拒否する子ども—北大路書房)
- Boivin, M., Thomassin, L., & Alain, M. 1989 Peer rejection and self-perception among early elementary school children: Aggressive-rejectees vs. Withdrawn-rejectees. In B. Schneider, J. Nadel, G. Attili, & R. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective*. Norwell, MA: Kluwer Academic.
- Crick, N.R., & Dodge, K.A. 1989 Children's perceptions of peer entry and conflict situations: Social strategies, goals, and outcome expectations. In B. Schneider, J. Nadel, G. Attili, & R. Weissberg (Eds.), *Social competence in developmental perspective*. Norwell, MA: Kluwer Academic.
- Crick, N.R., & Dodge, K.A. 1994 A review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Dodge, K.A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter, (Ed.), *The Minnesota symposium on child psychology*, Vol.18, Hillsdale.
- Dodge, K.A. 1991 Emotion and social information processing. In Garber, J. and Dodge, K.A. (Eds) *The Development of emotion regulation and dysregulation*. Cambridge University Press.
- Dodge, K.A., Asher, S. R., & Parkhurst, J.T. 1989 Social life as a goal-coordination task. *Research on motivation in education Vol.3: Goals and cognitions*. Academic Press.
- Dodge, K.A., Pettit, G.S., McClaskey, C.L., & Brown, M.M. 1986 Social competence in children. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, 51, 7-85.
- Dodge, K. A., & Price, J.M. 1994 On the relation between social information processing and socially competent behavior in early school-aged children. *Child Development*, 65, 1385-1397.
- Dolgin, G.D. 1986 Needed steps for social competence: strengths and present limitations of Dodge's model. In M. perlmutter, (Ed.), *The*

- Minnesota symposia on child psychology*, Vol. 18, Hillsdale
- Elkind, D., & Bown, R. 1979 Imaginary audience behavior in children and adolescents. *Developmental Psychology*, 15, 38-44.
- Erdley, C.A., Asher, S.R. 1996 Children's social goals and self-efficacy perceptions as influences on their responses to ambiguous provocation. *Child Development*, 67, 1329-1344.
- 濱口佳和 1992a 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動に関する研究－仲間集団内での人気ならびに性の効果－ 教育心理学研究, 40, 420-427.
- 濱口佳和・新井邦二郎 1992b 児童の社会的情報処理と行動との関連についての研究－仲間による挑発場面をめぐって－ 筑波大学心理学研究, 14, 107-119.
- 濱口佳和 1992c 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究. 教育心理学研究, 40, 224-231.
- 濱口佳和 1994 被害者児童の人格的要因(主張性, 愛他性, 攻撃性)がその社会的情報処理と応答的行動に及ぼす効果の検討 教育相談研究, 32, 45-61.
- 秦 一士 1993 P-Fスタディの理論と実際 北大路書房
- Hymel S., Bowker A., & Woody E. 1993 Aggressive versus withdrawn unpopular children: Variations in peer and self-perceptions in multiple domains. *Child Development*, 64, 879-896.
- 一谷 彊・林 勝造 1976 投影法の基礎的研究－Rosenzweig P-F Studyを中心として－ 風間書房
- 石田靖彦 1998 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, 14, 43-52.
- 加藤 司 2000 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成 教育心理学研究, 48, 225-234.
- Leary, M.R. 1983 *Understanding Social Anxiety*. Sage Publications. (生和秀敏 監訳 1990 対人不安 北大路書房)
- Lemerise E.A. & Arsenio W.F. 2000 An integrated model of emotion processes and cognition in social information processing. *Child Development*, 71, 107-118.
- 松尾直博・新井邦二郎 1997 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響 教育心理学研究, 45, 303-311.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- Renshaw, P.D., Asher, S. R. 1983 Children's goals and strategies for social interaction. *Merrill-Palmer Quarterly*, 29, 353-374.
- Rosenzweig, S. 1976 *Manual for the Rosenzweig Picture - Frustration (P-F) study, Adolescent Form*. St. Louis: Rana House.
- Rosenzweig, S. 1978 *Aggressive behavior and the Rosenzweig Picture-Frustration study*. New York . Praeger.
- Rubin K.H. & Asendorpf J.B 1993 Social withdrawal, inhibition, and shyness in childhood: conceptual and definitional issues. In K.H. Rubin & J.B. Asendorpf (Eds) *Social Withdrawal, Inhibition, and Shyness in Childhood*. Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Rubin, K.H., & Krasnor, L.R. 1986 Social-cognitive and social behavioral perspectives on problem solving. In M. Perlmutter (Ed.) , *The Minnesota symposia on child psychology*, Vol.18. Hillsdale
- 齊藤良夫 1981 疲労－その生理的・心理的・社会的なもの－ 青木書店
- 桜井茂男・桜井登世子 1991 大学生用シャイネス(shyness)尺度の日本語版の作成と妥当性の検討 奈良教育大学紀要(人文・社会) 40, 235-243.
- 産業疲労学会 1970 産業疲労の「自覚症状しらべ」(1970)についての報告 労働の科学, 25, 12-62.
- Zimbardo, P.G. 1977 *Shyness: What it is, What to do about it*. Massachusetts: Addison-Wesley. (木村 駿・小川和彦(訳) 1982 シャイネス I 内気な人々 勁草書房)

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

The study of college students' social information processing in entry situation.

Ken-ichi KUKIYAMA

The present study examines College Students' social information processing (SIP) in entry situation and relation between SIP and fatigue. Encoding, Interpretation, Clarification of goals, Response access, and Response decision steps and fatigue measures were collected from 218 college students. In encoding step of others' face expression, four groups (ignored, unnoticed, noticed but no care, care) were identified. Ignored group shows negative SIP —low in assertive goals and high in the rate of generation avoidant behavior. As a result of path analysis, it was found that response access step were moderately effected from interpretation step and clarification of goals step. In Response decision step, four groups (dependent, isolate, assertive, avoidant) were identified. Isolate and avoidant groups showed negative SIP, especially in clarification of goals step. In a study of relations between SIP and fatigue, high in awareness of fatigue related to negative SIP, which might lead avoidant behavior.